香 と 文 人

坂井多穂子（東洋大学）

昔の中国の知識人の公的な面を士大夫、私的な面を文人といいます。文人は文房四宝（筆・硯・紙・墨）をはじめとして、身のまわりにあるさまざまな物に対して、いわば「こだわり」をみせました。香もその「文人趣味」のひとつです。宋代に作られた香譜や詩を題材に、宋代文人がどのように香を楽しんだのか、その一端をお話ししたいと思います。

1　香の普及

まず、香はいつから文人の嗜好品になったのでしょうか。

香は太古の昔から文人にとってなじみぶかい日用品であったわけではありません。そもそも香の原産地は国外、とくに南方です。たとえば、もっとも代表的な香である「沈香」の原産地はいまのベトナムです。香は高級な舶来品であったのです。

中国に伝わったのは漢代ですが、当初、香が使われていたのは、寺院・道観など、仏教や道教の宗教施設でした。文人の生活空間に普及したのは唐代（618-907 年）から、宋代（960-1279 年）に入ってからです。

＜普及の要因＞

宋代の士大夫（文人）にとって香が身近なものになった原因には、環境的要因があります。（→資料１：地図）

隋代に大運河が開通し（610 年）、これによって、長江（揚州）と黄河が水路でつながりました。さらに長江の南方の支流である湘江と広西の桂江がつながり、よって、北宋の都（汴京）から南海まで水路一本でつながりました（実際には途中で船を乗り換える必要があったようですが）。宋代は、大運河を幹線とし、その他の河川が支線となった水上交通経路が発達した時代です。水路周辺の都市の経済発展は清代までつづきます。

唐代の都が長安にあったのは、西方（シルクロード）との交流を視野にいれてのことですが、北宋が都を汴京に置いたのは、水路の利用によって南方（南海）との交流をはかろうとしたためです。南宋には臨安（今の杭州）を都とし、金国によって北方や西方との交易が断絶するため、南方との交流はさらに盛んになります。その南海貿易によって、東南アジアから香（沈香・麝香など）が流通しました。

＜香の普及＞

香は宋代には文人の間に普及しましたが、それを端的に物語るのは、『香譜』の出現です。宋代に

は譜録が流行しました。譜録とは、動植物や器物を列挙して説明をくわえた書物のこと。牡丹や菊、蟹、琴など、さまざまな事物の譜録が作られました。

『四庫全書総目』巻一一五と一一六「子部　譜録類」には、文房四宝など多くの事物の「譜録」が収録されていますが、その大半が宋代以降に作られたものです。『香譜』については、

巻一一五「子部　譜録類」
・『香譜』二巻（宋　洪芻（字 駒父））
・『香譜』四巻（宋　陳敬（字 子中））
・『香乗』二十八巻（明　周嘉胄）
　　巻一一六「子部　譜録類存目」
・『香國』三巻（明　毛晉）
の四種が挙げられています。いずれも宋と明のものです。宋は文人趣味が本格化した時代であり、明はその最盛期です。

ほかにも、南宋　陳振孫『直齋書録解題』には、

『侯氏萱堂香譜』二巻
『香嚴三昧』十巻（不傳）
の二書も記録されています。

宋代以前の香の普及は、百科事典における「香」の分類に見ることができます。中国の百科事典を類書といいます。香についてまとまった分量の記載があるのは、唐初の『藝文類聚（げいもんるいじゅう）』（624 年）と北宋初の『太平御覧（たいへいぎょらん）』（980 年前後）です。前者からは六朝（222-589 年）の、後者からは唐代の香の普及を知ることが出来ます。

○『藝文類聚』
巻八一　「藥香草部上」（計１１種）
蘭・菊・杜若・蕙・蘼蕪・鬱金・芸香・@香・鹿@・蜀葵・薔薇…

○『太平御覧』（計４１種）
巻九八一　「香部一」
香・麝・葳香・鬱金・雞舌・龍脳・雀頭
巻九八二　「香部二」
蘇合・安息・薫陸・流黄・青木・旃檀・甘松・艾納・霍香・楓香・桟香・木蜜・栟香・都梁・沈香・

甲香・迷送・零陵・芸香

巻九八三　「香部三」

槐香・蘭香・@蕪・薫草・@車・杜蘅・白芷・荃香・薫香・兜末香・反生香・驚精香・白蛤狸・藁本香・神精香・龜甲香

二書をくらべると、『藝文類聚』では薬香草部、すなわち薬草と香草の部にあります。当初、香は薬草の一部であったことがわかります。いっぽう、『太平御覧』で」は「香」のみの独立した部になり、１１種から４１種へと種類も激増しています。この二書はいずれも勅命で編纂され、皇帝に献上されました。当時の文人の入手状況の如何を示すものではありませんが、六朝から唐代にかけて、中国国内に存在する香の種類が増加したことを見てとることができます。その主な要因はさきほど述べた水路の充実による南海貿易の本格化でありましょう。

２　陳敬の『香譜』

ここでは前章に挙げた陳敬の『陳氏香譜』四巻を取り上げます。陳敬の著を取り上げる理由はその成書時期と内容にあります。

『陳氏香譜』には熊朋来（1246～1323）が陳敬の子の陳浩卿に頼まれて「至治壬戌」（元 至治二（1322）年）に記した「序」があります（熊朋来はべつに『瑟譜』を著しています)。熊朋来の序文の一部を次に挙げます。

河南陳氏香譜、自子中至浩卿、再世乃脱藁。凡洪顔沈葉諸譜、具在此編、集其大成矣。詩書言：香、不過黍稷蕭脂、故香之為字、従黍作甘。・・・此時譜可無作。楚辞所録名物漸多、猶未取於遐裔也。漢唐以来、言香者必取南海之産、故不可無譜。

（河南の陳氏の『香譜』は、父の子中（陳敬）から子の陳浩卿の二世にわたってようやく完成した。洪（駒父）・顔・沈（立）・葉らの香譜すべてがこの書にあり、その大成を集めたものである。春秋期の詩・書にいわく、香は黍（きび）・稷（うるちきび）・蕭（よもぎ）・脂（あぶら）に過ぎず、ゆえに香の字の成り立ちは黍に従い甘に作る・・・この時期に香譜は作られなかったであろう。戦国期の『楚辞』に記される名物は増えたが、それでもはるか僻地の物は採録していない。漢唐以来、香を語る者は必ず南海産の香を取り上げるので、譜が無いわけにはゆかない)

とあるように、陳敬の『香譜』はそれ以前に作られていた数種の『香譜』の精華を集めたものです。陳敬の生卒は未詳ですが、子の陳浩卿が熊朋来に序を書いてもらった一三二二年にはすでに亡くなっており、南宋末から一三二二年以前の人ということになります。すなわちこの書は、時期的にも内容

的にも、宋代の『香譜』と文人の香を総括していると言えるでしょう。

陳敬の『香譜』（全四巻）はつぎのような構成になっています。

巻一

「香品」　（83 種）、「香異」　（７０種）　→原香の来歴、原産地

巻二・巻三

「凝和諸香」（223 種）　→合香の配合法、使用法

「佩熏諸香」（44 種）　→衣類等に焚きしめる香の種類とその方法

「塗傅諸香」（23 種）　→身体に塗りつける香粉や香餅等

「香品器」（７種）

巻四

「香珠」「香薬」「香茶」　→香の内服について

「傳」「序」「説」「銘」「頌」「賦」「詩」　→香を題材にした詩文を、文体ごとに載せる

まず、原香を説明したあと、調合法や使用法、道具の説明、そして香を描いた文学作品を紹介する、という構成になっています。なかでも、「凝和諸香」（合香）の種類が最も豊富で、原料となる香と分量を挙げて作り方を記しています。たとえば、

『陳氏香譜』巻二「凝和諸香　古龍涎香」

沈香半両　檀香　丁香　金顔香　素馨花各半両（広南有最清奇）　木香　黒篤宝　麝香各一分　顔脳二銭　蘇合油一字許

右各為細末、以皂子白濃煎成膏和匀。任意造作花子、佩香及香環之類。如要黒物、入杉木@（火孚）炭少許、拌沈檀同研。却以白芨極細作末、少許熱湯調得所将篤耨・蘇合油同研。香如要作軟者、只以敗蠟同白膠香少許、熬放冷以手搓成錠（煮酒蠟尤妙）

（右の原料をそれぞれ細かく砕き、黒い粒が白く細やかになるまで（？）煎りつけてあぶら状にしてととのえる。任意で花の形につくり、佩香や香環などとして身につける。もし黒い物がよい場合は、杉の木の炭を少し入れ、沈香や檀香を混ぜすりつぶす。また白トリカブトを粉末にし、少量の熱湯をくわえ篤耨香と蘇合油（樹脂）をともにすりつぶす。もし軟らかい香が欲しければ、敗蠟と白ニカワ少しを入れ、煎りつけて冷ましてから手でもんで丸める。）

「古龍涎香」の調合法は三種類、記されていますが、ここにその一つを挙げました。

「龍涎」（龍が海中で吐き出したよだれの意。アンバルという。アラビア原産）は、マッコウ鯨の体内の結成物で、「古龍涎」とは、北宋末の徽宗（1082-1135）が命名した珍品です。五代の後周の時

（958 年）に大食国（アラビア）の使者から献上されたという古い龍涎香をたまたま手にした徽宗は、当初は牛糞かと勘違いして臣下に下賜しましたが、のちにその価値に気付いて取り戻し、「古龍涎」と名付けて珍重しました。

ここでは合香によって、その名香の香りを再現しようとしています。本物の龍涎を原料に用いず、香の代名詞というべき「沈香」をはじめ、数種類の植物性香料を主原料とし、麝香という動物性香料をくわえます。『本草綱目』にみえる薬の調合法に似ています。

香の焚き方（焚香）は、つぎのような手順をふんでおこないます。

『陳氏香譜』巻一「焚香」
焚香必於深房曲室、矮卓置爐、與人膝平、火上設銀葉或雲母、製如盤形、以之襯香、香不及火、自然舒慢、無煙燥気。（『香史』より）
（香を焚く際には必ず奥まった部屋で、低い机に香炉を置き、人の膝と同じ高さにする。火の上に盤の形に作った銀葉あるいは雲母（耐熱性の鉱物）を置く。香をその上にのせると、火力は間接的に香に伝わるため、自然にゆっくりとのびのびしていて、煙もたたず焦げくささもない）

奥まった部屋で焚くのは、香りを逃さぬためであり、低い机に香炉を置くのは、香りがほどよく鼻に届く高さだからでしょうし、火加減を調整するのは、香の本来のかおりを充分に引き出すためです。香を充分に楽しむ作法がすでに確立していたことを示しています。

3　宋代文人の詩――焚香の方法

『陳氏香譜』の「焚香」の作法は、宋代の文人にとってもはや常識だったのでしょう。『陳氏香譜』よりも早くに、同様の記述が詩の中にもみえます。

南宋　楊万里（1127-1206）「焼香七言」

琢瓷作鼎碧於水	瓷を琢（みが）きて鼎と作せば　水よりも碧し
削銀為葉軽如紙。	銀を削りて葉を為れば　軽きこと紙の如し
不文不武火力均	文ならず武ならず　火力　均し
閉閣下簾風不起。	閣を閉じ簾を下せば　風起らず
詩人自炷古**龍涎**	詩人　自ら　古**龍涎を**炷（た）き
但令有香不見煙。	但だ香のみ有りて煙を見ざらしむ
素馨欲開末利折	素馨　開かんと欲して　末利　折れ

底迅**龍涎**和**檀桟**。　　底(なん)ぞ迅きや　龍涎と**檀桟。**

平生飽識食山村味　　平生　飽くまで識る　山村の味

不奈此香殊嫵媚。　　奈んともせず　此の香　殊に嫵媚なるを。

呼児急報蒸**木犀**　　児を呼び急ぎ報ず　**木犀を蒸せと**

却作書生真富貴。　　却て作す　書生の真富貴

（甕を水よりも碧くなるまで磨いて鼎（香炉）にし、銀を紙のように薄く削って銀葉（香敷き）を作る。（→資料２：『長物志』）

火力は弱くもなく強くもなく均一にして、部屋を閉めて簾(すだれ)を下ろせば風が起こらない。

詩人（わたし）は手ずから「古龍涎」を焚き、香だけが生じて煙はたたぬようにする。

素馨(ジャスミン)の花が咲きかけたところで折れてしまい（「古龍涎」の中のジャスミンの香りが物足りない）、龍涎も檀香・桟香もあっというまに消えてしまった。

ふだん田舎の味に親しんでいるせいで、この香がことにあでやかなのが我慢できない。

そこで子供を呼びつけて木犀を蒸すよう急ぎ申しつけ、これこそ書生のまことの贅沢だと感じた）

＜語釈＞

古龍涎：前出。

檀：＝檀香。沈香の一種。南海からの輸入品。

桟：＝桟香。沈香の一種。南海からの輸入品。

素馨花：ジャスミンの花。

末利：＝茉莉（ジャスミン）。

嫵媚：なまめかしく美しい。あでやかだ。

木犀：岩に生える桂の別名（後述）。

詩の前半は『陳氏香譜』の「焚香」とほぼ同じ内容です。香を焚く準備に手を抜かず、風や火加減にも留意して丁寧に香を焚いています。この「古龍涎」は徽宗の珍重した貴重品ではなく、さきほどの『陳氏香譜』にみえた合香でしょう。楊万里は、「古龍涎」に調合されたジャスミンや沈香（檀香・桟香）の香の成分を聞き分けて楽しんでいるのでしょう。「香を聞く」こと自体が、文人の楽しみになっていたことがうかがえます。

「木犀香」については、『陳氏香譜』につぎのような記述があります。

『陳氏香譜』巻一「香品　木犀香」

『向余異苑図』云、巖桂一名七里香。生匡廬諸山谷間、八九月開花、如棗花、香満巖谷、採花陰乾、以合香甚奇、其木堅韌。（後略）

（『向余異苑図』にいわく、巖桂は七里香ともいう。廬山の山々の間に生え、八月から九月に開花し、棗の花に似ている。香は山谷に満ち、花を採取して陰干しし、香をつくると非常に素晴らしい。（後略））

「木犀」は、廬山（今の江西省）に生える植物で、いわば国産品です。楊万里の郷里にあります。「山村の味」に慣れたために舶来の高級品は「あでやか」だと感じられ、国内（しかも地元）の山に生える木犀（を干したもの）を蒸した香を楽しんでいます（木犀を「蒸」す方法は不明）。楊万里はこの時、郷里から離れた常州（今の江蘇省）に勤務していました。自分を満足させた香は舶来の名香ではなく、地元の「山村の味」、木犀を蒸した香だった、という結句は、望郷の念を表現しているのかもしれません。

なお、これらの香はどのような香りだったのでしょうか。山田憲太郎氏（『香料　日本のにおい』法政大学出版局 1978 年）によれば、合香のなかで、沈香は「清澄優雅な香気」で、「草類の葉」は「甘美」な香り、麝香など動物性の香は「匂い全体を安定・結合させ、匂いを長く保ち、そして粘着性を増す」ように考慮されているとのことです。

4　宋代文人の詩句――焚香の時間の過ごし方

さいごに、「焚香」しながら、文人がどのように時間を過ごしていたのか、詩のなかからさぐってみましょう。

A清慮

1熟眠勝醉酒，**清慮**當**焚香**。（陳著「兪蓀墅示以雜興四首乃用危驪塘所次唐子西韻因次韻」其六）

B坐、読書（四書五経（**周易**）、**楚辞**、詩集）

1**焚香清坐**對**韋編**，妙處懸知不可傳。（王炎「即事六絶　其一」）

2**焚香**讀**周易**，意得氣自伸（王灼「王氏碧雞園六詠」）

3**焚香**正巾褐，聽汝讀**春秋**。（陸游「新秋以窗裏人將老門前樹欲秋爲韵作小詩十首」其十）

4置之勿復道，**焚香**誦**楚詞**（鄧深「寄題真樂齋」）

5清夜**焚香**讀**楚詞**，寒侵貂褐嘆吾衰。（陸游「夜寒二首　其一」）

6剩喜今朝寂無事，**焚香**閑看**玉谿詩**。（陸游「假中閉戸終日偶得絶句三首」其三）

7**焚香**細讀**斜川集**，候火親烹顧渚茶。（陸游「齋中弄筆偶書示子聿」）

8小圃追涼還得熱，**焚香清坐**讀**唐詩**。（楊萬里「中元日午」）

C掃地

１衡茅隨力葺幽居，**掃地焚香**樂有餘。（陸游「北窗即事二首」其一）

２小几研朱晨點易，重簾**掃地**晝**焚香**。（陸游「閑詠」）

D喫茶

１鈍置詩盟酒約，只自**焚香喫茶**。（白玉蟾「呈嬾翁　其一」）

E閉鎖した空間で１人すごす

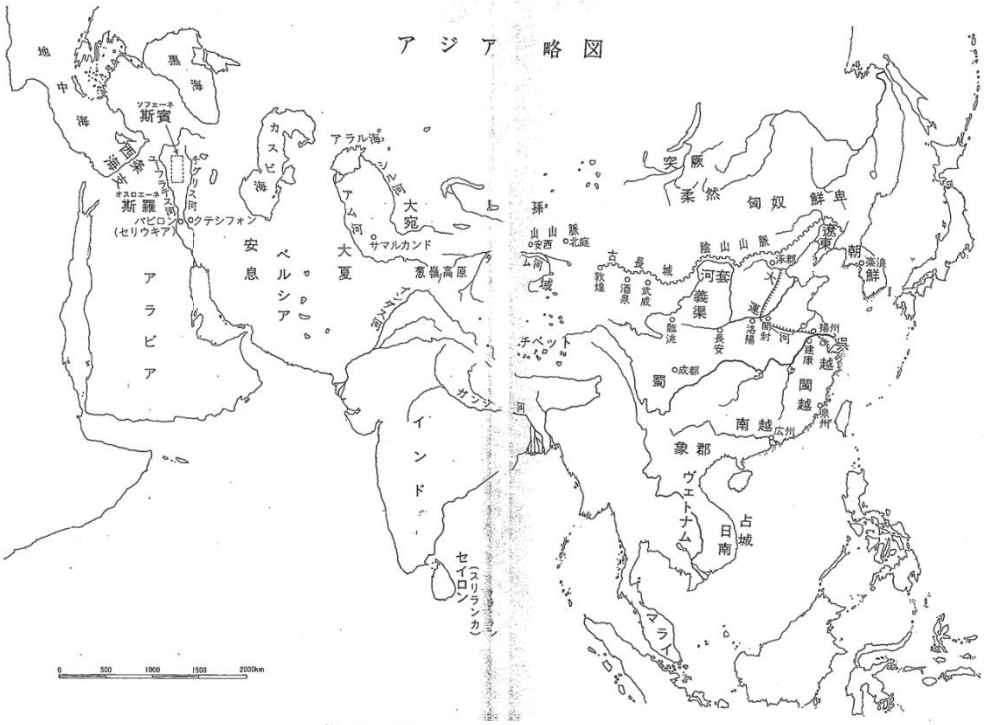
１折梅著句聊排悶，**閉戸焚香**剩放慵。（陸游「睡起書事」）

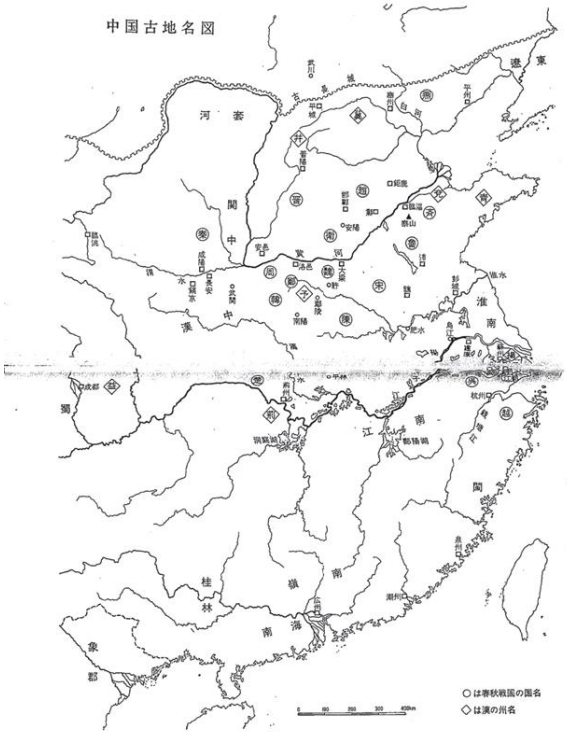
２**焚香**燒燭**恣狂吟**，管甚鼕鼕催五鼓。（胡仲弓「抱拙以三通鼓爲韻見寄次韻」）

ここからわかるのは、文人が「静謐かつ清浄な空間（書斎）に香りを満たす」という行為は、いわば、「自分一人の世界にとじこもるための切り替えスイッチ」であるということです。香を焚くことによって気持ちを落ち着かせ、思考や読書に集中することができました。彼らにとって香は、けっして「睡眠前のリラックスアロマ」などではなく、おのれの精神世界の構築を手助けしてくれる嗜好品でした。閉鎖された空間で香を焚くことによって、自身を外界から切り離し、精神活動をほしいままにすることができたのです。

（資料２）

（〔明〕文震亨著，澤田君注釈『長物志図説』より）
山東畫報出版社





資料１：地図

(宮崎市定『中国史』岩波全書 より)